The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伝後醍醐天皇筆吉野切考 ： 『堀河百首』初撰本としての性格
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1986, 47, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伝後醍醐天皇筆吉野切考

――『堀河百首』初撰本としての性格――

伊井春樹

一　吉野切について

後醍醐天皇筆と伝えられる吉野切については、つとに『古筆切名物』（了仲著）に「吉野切　天地七寸三分、四半、歌一首散書、恋歌也」と指摘されて以降、『古筆名葉集』『古筆切目安』（静嘉堂文庫）『古筆家秘書』（内閣文庫）『古筆名物切』（静嘉堂文庫）など、この種の書目には必ずといってよいほど取り上げられ、名物切としての位置にあったことが知られる。共通して指摘される特色は、四半切で、歌は一首の散らし書き、しかもいずれも恋歌であるとされる点である。『新撰古筆名葉集』になると、

吉野切　中四半形、歌恋、述懐、御自詠、古歌交り、一首チラシ書

と、記述が長くなるが、基本的な吉野切の性格は変わらない。田中塊堂の『昭和古筆名葉集』はこれを踏襲し、「竪七寸五分、巾五寸」との書入れが見られる。さて、新たに加えられた知見は、恋歌だけではなく「述懐」もあること、「御自詠、古歌交り」と、歌の典拠に言及されたことである。吉野切の名称が、後醍醐天皇の行宮に由来することは容易に理解できるにしても、「御自詠」とか「古歌」とはどのような資料にもとづいての発言か、きわめて気になるところである。今日この吉野切の評価について、「恐らく自筆自詠の御製集の断簡ではないかと考えられる」（『藻塩草』）、「天皇の宸翰には論旨・願文・懐紙・書状などがあるが、それらの筆跡とよく似たものがあり、おそらく自詠自筆の御歌集断簡であろう」（『見ぬ世の友』）、「この伝称（『新撰古筆名葉集』）には、かなり信憑性があると思われる」（『翰墨城』）などと、それぞれ押される手鑑の解説で、自筆の御製集であると主張する。『新撰古筆名葉集』の記述を積極的に否定するだけの根拠がなく、しかも後醍醐天皇の筆跡と吉野切とが近似するとなると、このような評価は当然のことであろう。

これに対して春名好重氏は批判的な立場にあり、『古筆大辞典』で筆跡の異なりを指摘し、「それ故、『吉野切』は後醍醐天皇の宸翰ではない。もと吉野山のどこかに伝えられていたので、後醍醐天皇の宸翰といわれたことと考えられる。書写年代は南北朝時代である。（中略）すべて恋の歌である」と、吉野切の名称はたんに吉野山のいずれかの伝来によるとする。後醍醐天皇の筆跡であるかどうかは、

このように評価がまったく異なるように、判断するのは困難だが、書写された時期は南北朝とみて間違いないと思う。流麗な散らし書きで、しかも気品のある書きぶりから、古筆家では宸筆として扱ってきたのであろう。

吉野切は色紙のような体裁をとるが、もとは冊子本である。一部の断簡の端に明らかに綴じ糸による穴が四つ見いだされるのによって、それと知られる。今日目にする吉野切の歌は、ほとんど恋歌といってよいが、「述懐」も存したとなると、同じ冊子に分類されて収められていたのか、恋歌部とか述懐部とか帖を異にしていたのであろうか。また、もっとも問題となるのは、「御自詠、古歌交り」とする点で、後醍醐天皇の自詠と古歌とは混在して書写されていたのか、一冊の中で判別できるようになっていたのであろうか。同一筆跡で、基本的に上下二段に分けられた散らし書きの体裁をとる。後醍醐天皇の「御自詠」とすると、これは今は失われた私家集の断簡ということになる。勅撰集などに残された歌の多さからいっても後醍醐天皇に家集が存したと想定することもあながち無理ではなかろう。ただ共通する歌が奇妙にも一首も見られないのは、恋歌という特殊性によるのであろうか、またなぜ「古歌」を「自詠」の中に混ぜたのか、「古歌」とはどのような歌であろうか、などと次々と疑問が起こらないでもない。

このような疑念も、あまりにも『新撰古筆名葉集』の記述に振り回されすぎたことと、吉野切は一首も現存の歌集類には見いだすことができないとの指摘に、先入観となってそれ以上の探索の努力を怠ってきたことによるのであろう。今日知られる吉野切をできるだけ集め、一首ずつ点検する作業から始める必要がある。

二　吉野切と『堀河院百首』

大東急記念文庫蔵古筆手鑑『筆陣豪戦』に、後醍醐天皇筆とする次のような吉野切一枚が押される（吉野切はいずれも散らし書きだが、以下普通の歌として翻字する）。

くりかへしあまてる神の宮はしらたちかふるまてとはぬ君かな

この歌は、思いがけなくも『新勅撰和歌集』（新編国歌大観　巻十二・恋二・七四〇）に次のような詞書を持って収められているのを見いだす。

堀河院に百首歌たてまつりける時　権中納言国信

くりかへしあまてる神の宮ばしらたてかふるまであはぬきみかな

この詞書によって、国信が堀河院の求めによって詠んだ百首歌の一首であることが知られる。『堀河院御時百首和歌』[1]（以下『堀河百首』とする）を見ると、恋の「不遇恋」に、

くりかへしあまてる神のみやはしらたてかふるまてあはぬきみかな　国信（一一五五）

と、一部に語句の違いはあるものの、そのまま収められる。なお、吉野切の第五句「とはぬ君かな」は、『堀河院百首』の諸本いずれとも一致しない独自本文である。

吉野切の一首が『新勅撰集』に入集しており、しかもその資料となったのは『堀河院百首』であったという事実は、意外な驚きというほかはない。このようなことに古筆家も気づき、後醍醐天皇の自詠とされるものの、それ以外の歌も見いだされることから、「古歌交り」と注記したのではなかったであろうか。

「書宛」に収められる吉野切、

うしとのみ人の心をみしまへのいりえのこものおもひみたれて

も、『新拾遺集』（巻十二・恋二・一〇一五）に、

堀河院御時たてまつりける百首歌に　権大納言公実

うしとのみ人の心をみしま江のいり江のまこもさぞみだるらん

として入集し、これは未大抄にも見られるほか、勿論詞書通り『堀河院百首』にも、「恨」に、

うしとのみ人の心をみしまえのいりえのこひのおもひみたれて

公（一二六五）

とある。この二首の存在によって、吉野切の歌が『堀河院百首』に偶然入っているのではなく、何らかの関係があると知られるだろう。さらに続けると、手鑑『鳳凰臺』の、

けさこそははつかにみつれほともなくなにとみたるゝ心なるら

む　隆源（一一三三）

は、『堀河院百首』の「初恋」に、

けさこそははつかにみつれほともなくなにとみたるゝ心なるら

む

とあり、「長松庵金子・某家目録」（東京、昭和十四年六月）とする入札目録の、

くるゝまもさためなき世にあふことのいつともしらてこひわたるかな

も、『堀河院百首』の「不遇恋」に、

くるゝまもさためなきよにあふ事をいつともしらて返ぬるかな

隆源（一一六五）

と一致する。

こうなると、吉野切の歌は『堀河院百首』の資料であったと言いたくなるのだが、今のところ共通するのは右の四首だけで、あとは勅撰集その他の歌集、歌合などにもまったく見いだすことができない。このような現象は、どう解すればよいのであろうか。

吉野切は、これまで三十首ばかり収集しているが、この数は今後とも増えていくであろう。田中登[2]氏が遠藤千胤（桂園派歌人）の遺稿集のうち、古人の筆跡類のメモと思われる中に、

後醍醐天皇御製　吉野色紙　聖護院所蔵

きくもうしまたいつはりの夕暮はふくとなつけそ庭の松風

同　駒井氏所蔵

いたつらにあはて年ふる恋にのみ朽ぬる袖の名をいかにせん

あひみての後さへ人の恋しきはいつを限のおもひなるらん

とあるのを見つけられ、「吉野色紙」は吉野切を指すのであろうとされた。まさにその通りのようで、右の三首のうち最後の歌は「松風聴松庵氏遺愛品入札目録」（京都、昭和四年一月）や「上京神田氏所蔵品入札目録」（京都、某年十二月三日）に収められる吉野切に、

あひみてののちさへ人の恋しきはいつをかきりのおもひなるら

む

とあるのによって確かめられる。そうすると、「吉野色紙」とする他の二首も同じく吉野切であったと考えて間違いあるまい。

このようにして集めた吉野切の歌が、『堀河院百首』と四首まで重なりを見せ、緊密な関係にあることを思わせながら、それ以外の大半の歌はまったく一致しない。吉野切が完成度の高い書写であるのを思うと、たんなる『堀河院百首』の資料というのではないだろ

う。このあたりの事情について、『堀河院百首』の成立と関連させながらもすこし考えてみることにする。

三　『堀河院百首』の成立

『堀河院百首』は、勅撰集の詞書に「堀河院御時たてまつりける百首歌に」とあるように、歌人たちから百首歌が提出され、それを配列して成立したというような単純な応制百首でなかったことは、つとに石田吉貞博士によって明らかにされている。[3] その中心となるのは、百首歌が初めから堀河院のもとで企画されたのではなく、まず民間のもとに成立し、それが宮中に聞こえて完成したとする二次の過程を考えたことである。さらに、第一次的成立は康和年間、第二次的成立は長治元年十二月以後年末までと限定される。

その後、『堀河院百首』の成立はこの視点を軸にしてさらに詳細に考察されていくが、上野理氏[4]は人選からみて公実が中心となり、彼の邸で披講された後叡聞にたっして召覧、俊頼が撰者となってまとめたのが現存本であるとする。また、橋本不美男・滝沢貞夫の両氏[5]は、『堀河院百首』の校本を作成するとともに、従来の諸説を総合して新たな成立説を展開していった。それによると、当初は俊頼によって企画、推進された「左京権大夫百首」が、やがて中央政界の実力者で白河仙洞と密接な公実・顕季、歌壇の長老でもあり題者としての権威づけもできる匡房等を加え、晴れの催しとなる百首歌に発展していった。このようにして、長治二年五月から翌三年三月の間に、題者大江匡房、勧進者藤原公実の形式で堀河天皇に奏覧されたとする。初めは十四人本だったが、やがて詠進の遅れた源顕仲が、さらに永縁の百首歌も加えられて、十五人本、十六人本と成長していったともいう。

誰が発起したのか意見の分かれるところだが、共通するのは初めは私的な百首歌だったのが、やがて成長して堀河天皇に奏覧されるという晴の応制百首に成長していったということである。神宮文庫蔵三条家本の巻末に、

俊頼朝臣自筆本書写了、於朱砂点者、以肥後公家本移了云々、
件肥後公家本点ヲハ此事ニハ不点ヲ懸了、
此百首和歌実非　勅宣、唯春宮大夫発詞各随喜之輩詠之、於彼
大夫家被講之、其後及叡聞令覧之被切続之、仍号堀川院百首云
々、

とある由だが、[6] その真偽はともかくとして、春宮大夫公実が発起し、「随喜之輩」が百首歌を詠んだ後、公実邸で被講、それが堀河天皇の叡聞にたっして「奏覧」したという、上野氏の典拠とした説が記される。その第一次本から第二次本への過程に「被切続之」と切続のあった事実はもっとも注目されよう。

しばしば引用されるところだが、『今鏡』（すべらぎの中第二たまづさ）には、『堀河院百首』の成立に関して次のような記述がある。

又時の歌詠み十四人に、百首の歌おのおの奉らせ給ひけり。男、女、僧など、歌人みな名あらはれたる人々なり。題は匡房中納言ぞ奉りける。この世の人、歌詠む中だてには、それなむせられける。尊勝寺造られ侍りける頃、殿上人華鬘あてられ侍りけるに、俊頼歌人にておはしけるに、百首歌案ぜむとすれば、五文字には「華鬘の」とのみ置かるゝといふと聞かせ給ひて、「不便の事かな」とて、除かせ給ひけるとぞきこへ侍りし。

『堀河院百首』は、十四人本なり十六人本が出現するにいたるま

でには、かなり複雑な成立事情があったようで、それだけに右の記事もその背景を考慮に入れながら読む必要がある。「男、女、僧など、歌人みな名あらはれたる人々」といっても、当代のすぐれた歌人の代表というのではなく、かなり偏りのある選定であったことはすでに明らかにされている。そのようなことを思うと、匡房が題者であったとするのも、それが事実であったにしても第一次本からの責任者であったのかとなると、疑問が起こってこざるを得ない。それに、「尊勝寺造られ侍りける頃」が、康和四年（一一〇二）七月二十一日の落慶供養を指すとすると、その頃堀河天皇が「華鬘」の題を自らの意志で削除したとする立場と、題者としての匡房とはどのような関係にあるのであろうか。

「華鬘」の歌題は、雑の部に存したのだろうか、それを出したのは『今鏡』の文脈によると匡房だったのであろう。十四人のすべての歌人に課せられた歌題だったはずだが、俊頼にとっては「華鬘の」と初句に置きながらそれ以下が続かず、苦吟するばかりであった。この「華鬘」が百首歌の題となったのは、堀河天皇御願の尊勝寺落慶供養にともなうもので、いわば堀河天皇の歓心を買う性格といえる。供養の当日、仏前にはこの華鬘が荘厳の具として飾られたに違いなく、それを祝って取り上げられたのであろう。結局のところその歌題は百首歌から削られることになったが、その意向は堀河天皇自身によるという。

このようにして十四人の歌からは「華鬘」の歌が消えることになったが、俊頼などがこの時期に詠んでいた百首歌というのは、明らかに堀河天皇に献上することが予定されている。堀河天皇も関知しての百首歌だったからこそ、その責任によって削除することを了承したのであろう。換言すれば、「題は匡房中納言ぞ奉りける」と言いながらも、すべて彼の裁量に任されていたのではなく、その背後には堀河天皇が介在していたようで、その意向によって歌題も決められていたことを思わせる。そうするとこの折の俊頼は、いわゆる第二次本の百首歌を詠んでいたのであって、第一次本はそれ以前にすでにできあがっていたことになる。百首歌が堀河天皇の叡聞するところとなり、あらためて匡房に歌題の再検討を求め、その過程で従来の歌を改めて「華鬘」が雑の部に挿入されることになる。尊勝寺の供養にあわせて完成させることを目ざしていたのであろうが、ただ実際にできあがるまでにはまだ数年を要したようである。

また、これまでもすでに引用されて、第一次本から第二次本への具体的な切継ぎの資料とされているのに、『袖中抄』の次のような記述がある。

或人の申されしは、公実卿被詠百首歌之時、郭公歌云、

をちかへりいはになけとも時鳥二四八ともにめつらしきかな

此歌はかの古歌をよみうつされたる歌也、二四八詞歌注進之由堀川院より被仰下之時、此歌をとゝめて、

われやさはいりやしなましほとゝきす山路にかへるひとこゑにより

と云歌を被入たり、

公実詠は「郭公をちかへりなけうなゐこがうちたれがみのさみだれのそら」（拾遺集巻二、夏、躬恒）の古歌に依拠しているのであろうが、そこでの「二四八」との語句について堀河天皇から注解を求められると、彼はその歌をとどめて新たに詠進しなおしたという。

現存の『堀河院百首』では、後者が収められているため、「をちかへり」はいわば第一次本から第二次本へと成長変貌する過程で消滅した歌といえよう。

『華鬘』の歌題にしても、右の公実詠にしても、これらの残された断片的な資料から想定すると、第二次本の成立には堀河天皇の存在がかなり大きな役割を占めていたようで、それに第一次本との違いは少々の手直し程度ではなかったように思う。「華鬘」をやめて新たにどのような歌題を人々に与えたのか分からないが、この種の差替えはまだほかにいくらもあったであろうし、同じ歌題の歌であっても公実のように詠み改めることもあった。もはや実質の無くなった第一次本は、今日想像する以上に異なった歌題と歌を含んでいたのではないかと思う。

四　第一次の出現

従来、尊勝寺落慶供養の康和四年七月の頃に、俊頼が苦吟しているように『堀河院百首』の第一次本が作成されたとする考えが大勢を占めていた。第二次本はそれ以降になるのだが、ただ私は堀河天皇の介在した様相から、むしろ康和四年当時すでに第一次本が存在し、それに大幅な手直しをしていた時期と見なしたい。『今鏡』の記述は、私的に出発した百首歌が晴の応制百首となり、全面的に改訂することを求められ、その期待に応えて努力する俊頼像が描かれているのであろう。

『祐子内親王家紀伊集』に、

左京の権大夫百首のうち

うくひす

われならむ人きくらめやめつらしきあしたのはらのうくひすのこゑ（四六）

として、以下「わかな」「むめ」「さわらひ」などの題のもとに二九首の歌が配列され、そのいずれもが『堀河院百首』と一致する。それ以外の七一首はなぜ収録しなかったのかはともかくとして、その詞書に「左京の権大夫百首」と記されるのが注目される。俊頼は長治二年（一一〇五）に木工頭になるまでには、およそ二十年近く左京権大夫に任じたままになっていた。[7]『夫木和歌抄』などにも「左京権大夫百首」のことばが見えるため、ある時点まで俊頼の企図し集めた百首歌と見なされていたことは確かであろう。それはいつの頃か、どのような歌人たちが歌を求められていたのかとなると、まったく不明というほかはない。

大江匡房は永長二年（一〇九七）に大宰権帥に任じられて翌年下向し、康和四年六月に帰京、といった行動からすると、当初から百首歌の歌人ではなかったのではないかと思う。上京して一ヵ月ばかり後に尊勝寺の落慶供養が催されているので、堀河天皇は都に戻った匡房を早速召し、晴の百首歌として体裁を整えるよう命じたのが『今鏡』の記事ではないであろうか。匡房が落慶供養までに百首の歌題を選定するのには、時間的に余裕がないため題者ではあり得なかったとする意見もありはするが、すでに述べたようにそれは第二次本の策定と考えればすこしも困難なことはない。それとともに彼自身も人数に加わり、百首を詠んでいった。『匡房集』（私家集大成Ⅱ）に「恋十一首」として、「初恋」以下「寄草恋」までの十一首が置かれるが、そのうち初めからの十首までは『堀河院百首』の恋部と配列も一致する。十一首目の「ともすれはなひくさ山のくすか

つら恨みよとのみ秋風そふく」（一〇六）は、『堀河院百首』の歌題でもないため、後人が編纂の折付加したにすぎないと考えられなまくもない。ところが恋部「恨」の公実の詠に、異伝歌としてこの歌が一部の伝本に記されており、また河内の歌にも他の本文にこれが書き加えられる。明らかに匡房詠であるため、これらの諸本に公実や河内の、「恨」の別歌とする指摘はたんなる転写の過程に生じた誤りと思われる。匡房詠のすぐ前の公実に異伝の歌とするのは、もともと匡房の部分に記されていたものが、目移りによって書く位置を誤ったのであろうし、別の伝本では詠者名が分からなくなって「恨」の末にメモしていたのが、そのまま河内の歌と見なされてしまったのであろう。

それでは正しい位置に戻して、本来匡房の「恨」の異伝歌だったとするとどうなるのであろうか。帰京後百首歌を詠み始め、「恨」も「ともすれば」と詠んでいたのだが、最終的にはそれを削除して今日見るように「ひさかたやあまのとまやのもしをくさつらみる事のたへずもあるかな」にした、と考えられてくる。いずれも「恨」の歌として通用する。『匡房集』ではそれを破棄することなく、別の題を付して「恋十一首」として配列したのであろう。

匡房が第二次本から加わるようになったとするのは、例えば『江帥集』（I）で、

於大宰府詠之　かすみ

わきもこかそてふるやまは春きてそかすみのころもたちわたりける（一〇）

とする歌が、『堀河院百首』でそのまま「霞」に収められていることなどによる。九州の地で詠みためていた歌を、彼は百首歌に利用したのである。これ以外にも有るかもしれないが、それはともなく新たに参加した匡房の歌にも、堀河天皇の意向によるのか切継ぎが見られる。ましてや第一次本には、晴の百首歌への変貌に際して、人々に次々と改作の要求が伝えられたことであろう。

これまでのところ、諸本の博捜により五八首の異伝歌が採録されているが[8]、これらはたまたま書き留められて残されるにいたった第一次本の歌であろう。しかし、実態はまだまだ多かったはずで、歌題にしても第一次本以来まったく不変であったとは限らない。堀河天皇の好みにあわせて、俊頼の編纂していた百首歌は大きく変わっていったに違いない。

五　初撰本としての吉野切

吉野切の歌数は三三首、そのうち『堀河院百首』に見えるのは四首、残る二九首は異伝歌とも共通しない。ただ四首の詠者が、公実一首、国信一首、隆源二首という様相からすると、必ずや『堀河院百首』と緊密な関連のもとにできあがっていることを想定させる。公実なり国信が、歌合とか別の作品集に詠んでいたのを、百首歌に召されたため再利用したということは、他の例からみてもまず考えられない。匡房の場合は、大宰府での詠を利用したとは言え、それは嚢中の歌を百首歌の配列に加えたにすぎなく、吉野切と『堀河院百首』の関係とは明らかに異なる。

すでに述べたように、吉野切はもと冊子本、草稿本などではなく、すでに完成した作品としての書写の体裁をとる。しかも、そこに記された歌は、ほとんど恋の歌である。ほとんどというのは、一首だけ問題があるようで、『呉文炳蒐集手跡目録』に収められる、

よしのやまわかすむかたはきりこめよふもとのはなははるにあふとも

は、恋の歌とするにはためらいを覚えるし、『新撰古筆名葉集』に指摘する「述懐」とするのにもふさわしくない。秋の「霧」とともに「春」のことばも詠み込むという内容からすると、四季の歌とも律し切ないようで、やはり恋の部の「旅恋」といったあたりに処理すべきなのであろうか。これ以外は、一首一首たどっていくと、いずれも『堀河院百首』の恋の歌題に位置づけることができるようである。いくつか例示してみよう。

こひそめてわするはかりのとし月にあかす涙の袖ぬらすらん

これは恋部の初めに置かれる「初恋」と考えてよく、永縁の「池水のふかき心を年ふともいひ出さすはいかゝしらさん」（一一三二）などと発想を同じくするであろう。あるいはこれなどは康和二年四月二十八日の宰相中将国信歌合の「経年恋」の歌と考えてよいのかも知れない。

なへてより日かけもをそき心地してたのむるくれそしつ心なき

これは「後朝」のようで、顕仲の「かへりつるけさのたもとは露といひてくれまつそてをなにゝたとへん」（一一九四）と類似した内容のようである。

うしつらくたゝ我からよ身のほかにまたうらむへきことの葉もなし

は「恨」の歌、河内の「われからとおもふものからみくまのゝうらみてのみもすくしつるかな」（一二八〇）と、恋の悲しみから自己をひたすら恨む内容と相即する。

すべての歌がこのように分類できるのではなく、かなり無理をしてそれぞれの歌題のもとに処理せざるを得ない例もありはするが、ともかく恋の部に収まるのは確かである（「よしのやまわかすむかたは」の歌も、一応恋の歌と解釈しておく）。そうすると、吉野切は、恋の歌だけで一書になっていたはずで、四季とか雑の歌が存在しないところをみると、それ以外は書写されていなかったと思われる。それに散らし書きという体裁からすると、恋の部のすべてを転写したというのではなく、典拠とする冊子本から抄出した秀歌撰といったことではなかったであろうか。その典拠となるのが、これまで第一次本と称してきた初撰本の『堀河院百首』（当初は「俊頼百首」の名称だったであろう）である。

俊頼は個人的な企てとして百首歌を編纂して一書にすることを思いつき、公実・国信・隆源など幾人かに呼びかけた。祐子内親王家紀伊もその一人であっただろうし、後の『堀河院百首』のメンバーからははずれたような、きわめて俊頼の個人的な好しみによる人物も歌を寄せてきたことであろう。俊頼はそれを配列して、百首歌集をまとめたのである。その冊子本はあまり流布することもなく、ごく一部の限られた人々にしか伝えられなかった。南北朝にいたってその恋の部から歌を抜き出し、秀歌撰とも称すべきすばらしい冊子本が作成されるに至ったのである。それが、今日吉野切として伝えられる実態ではないであろうか。

初撰本とも言うべき「俊頼百首」は、その後康和四年にいたって晴の百首歌に変貌することになった。その時点では、堀河天皇の意向が強く反映し、歌題や歌の差替えのほか、詠者の変更、追加もあったであろう。とくに恋部については、当時の宰相中将国信歌合や、康和四年閏五月二日、七日の内裏艶書歌合などに見る恋歌の流

行ともあいまって、大幅な手直しがあったのではないかと思う。このようにして第一次本から今日の第二次本へと成長したのだが、もちろん吉野切の公実・国信・隆源の歌に見るように、改作することなくそのまま用いた例もあった。吉野切は初撰本の恋部から抄出したため、第二次本では消滅した歌が多く残される結果となったのであろう。第二次本の『堀河院百首』を典拠としたのであれば、公実や国信・隆源の一部の歌とだけ一致し、あとはまったく重ならないというのはどうしてなのか、むしろ矛盾が大きくなってくる。さらに堀河天皇歌壇の周辺で成立した諸書から恋の歌だけを集成したのではないかとする考えもできなくはないが、それならばもっと共通する歌があってもよいはずである。さらに、堀河天皇のもとで、今日は失われた恋の歌集ができあがっていて、その転写が吉野切ではないかとの想像も可能とはいえ、『堀河院百首』の歌を利用したとは考えられないので、これも成り立たないのではないか。

吉野切は今のところ三十三首にしかすぎなく、『堀河院百首』と共通するのがわずかに四首という現状からは、想像するにしても資料があまりにも少なすぎる。ただ私は、初撰本とも呼ぶべき第一次本から現存本への成長には、今日考えられる以上の改作、変更があったのではないかと思っている。その変貌前の姿を、一部なりとも伝えているのが吉野切ではないであろうか。

六　吉野切拾遺

これまで収集した吉野切を、『堀河院百首』の恋の歌題に従って一応配列しておく。通し番号を付したが、※は『堀河院百首』に収載されている歌であることを示す。

初恋

※1　けさこそはは つかにみつれほともなくなにとみたるゝ心なるらむ（徳川美術館蔵『鳳凰書』）

2　こひそめてわするはかりのとし月にあかす涙の袖ぬらすらん（「山王荘目録」大阪、昭和十年十月）

不遇恋

※3　くりかへしあまてる神の宮はしらたちかふるまてとはぬきみかな（大東急記念文庫蔵『筆陣豪戦』）

4　あふことはかた野ゝみのゝかりにたにといくる人のなきそかなしき（陽明文庫蔵『大手鑑』）

5　あふとみるゆめたにせめてさめさらはうつゝのうさはさもあらあれ（「布留鏡」二一二七）

6　さめてこそ□□□□□けれゆめの中の人の契をたのむ□□□□（「早川家蔵品入札」東京、大正十二年五月）

7　つれもなき人を浦見のはま千鳥ねをのみなけとかひなかりけり（京都国立博物館蔵『藻塩草』）

※8　くるゝまもさためなき世にあふことのいつともしらてこひわたるかな（「長松庵金子家・某家目録」東京、昭和十四年六月）

9　いたつらにあはて年ふる恋にのみ朽ぬる袖の名をいかにせん（「遠藤千胤遺稿集」）

10　あふさかやせたもる神もしるへしてまよふこひちのゆくえししらせよ（「当市寺村豊庵氏及某家所蔵品入札」京都、昭和八年五月）

初遇恋

11　またよいとなかめて人をまつ程にやゝふけはつる月の頃かな

（大東急記念文庫蔵『手鑑』）

12 あひみてののちのつらさのいかならむよそなからたにかはる心に（田中登氏蔵[9]）

13 あひみてののちさへ人の恋しきはいつをかきりのおもひなるらむ（「上京神田氏目録」京都、某年十二月三日・「遠藤千胤遺稿集」）

14 またとたにいふへき程のひまもなししのふかなかの心まよひに（「故織田徳兵衛氏遺愛品目録」名古屋、昭和六年九月）

後朝

15 なへてより日かけもをそき心地してたのむるくれそしつ心なき（『日本古筆名葉集』）

16 たのましや人の契のあさゆふにかりにむすへるつゆのことの葉（『舞羅千東離』）

17 あか月のわかれにつらくきくよりもまつ夜ふけぬる鳥のねそうき（「鈴木家所蔵品入札」東京、昭和八年四月）

遇不遇恋

18 いつゝりのなさけはかりにといくれとおもはぬなかは夜をそとをさぬ（徳川美術館蔵『吉野切帖』）

19 またもこむことの葉はかりいたみにてよそになれゆく人のおもかけ（「書画美術品展観入札売立会目録」大阪、昭和三十八年二月）

旅恋

20 よしのやまわかすむかたはきりこめよふもとのはなははるにあふとも（『呉文炳蒐集手跡目録』）

21 わすれはやかせはむかしのあきのつゆありしにもにぬ人のおもかけ（白鶴美術館蔵『手鑑』）

思

22 いまこそは袖の涙をしくれにてことの葉なから色にもらさめ（出光美術館蔵『見ぬ世の友』）

23 いつはりにふけゆくうさを色にいてゝいはゝ涙のひまやあらまし（中村記念美術館蔵『手鑑』）

24 いかにせむたまのをはかりあふことをいのちのうちのちきりならすは（白鶴美術館蔵『手鑑』）

25 わすられはうきにすてむとおもひしにまたあひゐるも命なりけり（「有賀家所蔵品目録」東京、昭和十年十月）

片思

26 うきなかにのこる涙をかたみにてみしおもかけそとをさかりゆく（MOA美術館蔵『翰墨城』）

27 しのはしよなれしおもかけいひし契身にそふかいのあらはこそあらめ（徳川美術館蔵『吉野切帖』）

28 なからふるかいこそなけれあふことにかへぬいのちののこるつらさは（『梅園奇賞』）

恨

※29 うしとのみ人の心をみしまへのいりえのこものおもひみたれて（「書苑」七―五）

30 うしつらくたゝ我からよ身のほかにまたうらむへきことの葉もなし（徳川美術館蔵『吉野切帖』）

31 うしとのみいひてもしたふ心かなつらくは人のわすられもせて（右同）

32 きくもうしまたいつはりの夕暮はふくとなつけそ庭の松風

（「遠藤千嵐遺稿集」）

33　いかにせむ春やむかしとかこちてもくれゆくそらをえこそうらみね（「松浦伯爵家並某家蔵器展観入札」東京、昭和九年十一月・「某大家蔵品入札」東京、昭和十四年六月）

注

（1）本文は、橋本不美男・滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究』（昭和五十一年刊、笠間書院）による。

（2）「古筆切三首―定家筆高光集切・広沢切・吉野切―」（「青須我波良」第二十六号、昭和五十八年七月）

（3）『新古今世界と中世文学　上』（昭和四十七年刊、北沢出版）所収「堀河院百首の成立とその他について」（「国語と国文学」昭和九年九月）

（4）『後拾遺集前後』（昭和五十一年刊、笠間書院）所収「堀河院の御時百首の歌めしける時」（「国文学研究」三二、昭和四十年十月）

（5）注1に同じ。

（6）注1の「伝本とその系統」による。

（7）源俊頼および堀河歌壇における位置づけについては、橋本不美男著『院政期の歌壇史研究』（昭和四十一年刊、武蔵野書院）に詳しい。

（8）注1に同じ。

（9）注2および、藤井隆・田中登著『国文学古筆切入門』（昭和六十年刊、和泉書院）

（付記）

「東万町大口松所翁城西閑壺庵外某家所蔵品」（名古屋、大正十一年三月）に「とりのねの」の初句を持つ吉野切が見いだされるが、写真が不鮮明でこれ以上判読できない。このほかにも精査すれば採録できるであろうが、今後に期待したく思っている。

本稿は、和歌文学会関西例会（昭和六十年七月六日・於大阪女子大学）での発表をまとめたものである。会員の方々の御教示を深謝する次第である。

―本学文学部助教授―

国語国文学会　会員近著紹介

島津忠夫他著　**『和歌史―万葉から現代短歌まで―**

本書は、「万葉から現代短歌まで、読みものとしての和歌史を意図」（あとがきより）して編まれたものであり、先に刊行された『和歌文学選―歌人とその作品―』と姉妹編を成している。和歌の歴史を十期に区分し、神野志隆光・芳賀紀雄・田中登・竹下豊・佐藤恒雄・稲田利徳・上野洋三・山崎芙紗子・太田登・島津忠夫の十氏が執筆され、そのうち島津忠夫氏は、現代短歌を担当しておられる（和泉書院　昭和60年4月30日　一八〇〇円　二九〇頁）

平安文学論究会編　**『講座平安文学論究　第二輯』**

昨年刊行された第一輯が私家集関係の論文を収めていたのに続き、本書第二輯は、古今和歌集に関する十一の論文を収載している。そのうち本会会員では、今井優氏が「古今集恋歌の様式―その基底を探る―」、神谷かをる氏が『よむ』歌から『いふ』歌『かく』歌へ」、三輪正胤氏が「古今伝授史上における宗祇と吉田兼倶」を執筆され、田島智子氏が古今和歌集文献目録を担当されている。（風間書房　昭和60年5月31日　八〇〇〇円　三三八頁）